

# はじめに

「歴史街道」計画は1988年、「世界を考える京都座会」によっておこなわれた「歴史街道づくりの提言」( 1 )に、その端を発する。

日本を代表する21の歴史舞台をほぼ時系列的に結ぶ「メインル-ト」( 3 )を中心に、官民連携、地域の広域的連携をもって、「歴史文化を活かした地域づくり」「新しい余暇ゾーンづくり」「日本文化の発信基地づくり」(以下、3つの目標 2 )を進めていこうとする計画である。

1991年に発足した「歴史街道推進協議会」(以下、協議会 4 )には、2002年現在、約200の会員団体が参画。「全体事業」を始め、各種の「共同事業」、各団体が役割を分担して実施する「関連事業」などが推進されてきた。

10年余りの活動成果を発展させ、遠い未来の人々からの評価に資するものへと高めていくことは、これからの計画に関わる者たちに課せられた大きな責務である。

もちろん、この計画はまだ、大きな発展の途上にある。

「3つの目標」がそれぞれに実現の方向に向かっているとは言い難く、未だ道半ばの分野や忘れさられつつあるような方向性も多い。

組織について、10年以上の活動ゆえの緩みや衰退部分を指摘する声もある。

激しい時代の変化の中、常に自己批判を忘れず、新しい時代にふさわしい手法を選択し、実態に合わせて計画内容を見直していくことも、また、この計画に関わる者たちにとっての、必要不可欠な方向性といえるだろう。

さて、協議会ではこれまで、三年に一度、事業計画の見直しを実施してきた。

当計画書はその第四期目にあたる2003年から2005年をおおむねの対象時期として作成されたものである。

計画書の作成にあたっては、各分野でご活躍中の「ブレ-ン」の方々からの数々の批判を含めたご意見をお寄せいただき、それらを議論の出発点とさせていただいた(別冊1)。

内容に関連する各地域・団体での先進的な取り組み(22例)ならびに、協議会の各団体で推進されている「関連事業」についても参考資料の部で、できるだけ紹介させていただくこととした。

また、計画の進捗状況や各地域の魅力、ル-トのコンセプトである「タイムトリップ」をわかりやすくイメージしていただくために、別途、漫画(別冊2)による紹介も試みている。

ご協力いただいた各位に心からの感謝を申し上げたい。

2003年5月  
歴史街道推進協議会

## ( 1 ) 『「歴史街道」づくりの提言』

( 1988年3月「世界を考える京都座会」より発表されたもの )

外国人に「日本について何を知っていますか」と尋ねると、まず返ってくるのは商品と企業の名前です。経済大国の日本としてそれは当然でしょうが、それ以外のことがほとんど知られていないのは寂しいことです。文化や歴史、功績ある人々の名前などがほとんど知られていないのです。

「人間の顔のない経済大国」、「商品を吐き出すブラックボックス」。日本に対するこうした評価は正しいものではありませんが、私たち日本人もこれまでは、自国の文化や伝統、ところや生活感覚を世界に知らせようという意識が薄かったことも事実でしょう。いや今も、日本の文化やところを知らせるのは、貿易摩擦のため、よりよい経済関係を深めるため、つまり経済が目的で文化やところの問題はそのための手段という気持ちがあるのではないのでしょうか。

さらにいえば、私たち日本人自身も、物質的な豊かさ、物理的環境の快適さや便利さを追い求めるのに忙しく、その根底にある日本の文化や伝統や特有の発想について考える余裕を失っているきらいがあるのではないのでしょうか。

今や日本は、世界の16%もの生産力を持ち、世界の総輸出の5%にも当たる貿易黒字を計上し、世界中の貯蓄の半分以上を占める巨大な経済力をもつようになっています。日本の経済は、私たちの実感をはるかに超えて、国際化し巨大化しているのです。このままでは日本は「金儲けにしか関心のない国」という評価が定着してしまう恐れがあります。

このような現実を超え、日本人自身も外国の人々にも、長い歴史に培われた日本の文化とところを深く認識するような実効ある具体的な計画を考える必要があると考えます。

そこで、私たちが着目したのは、日本の文化、日本人のところが形成された過程を、その現場において見聞することです。

独特の風土を持ったこの国土で生まれた日本文化には、特有の性格があります。同時に世界にも類例のないこの国土の文明的位置の故に、東洋と西洋の文明を巧みに吸収し消化することもできました。現代の日本の文化と日本人のところは、そうした歴史の成果として築かれたものです。従ってこれを正しく認識し深く理解するためには、歴史現場においてそれぞれの時代の文物と環境を味わうことが大切でしょう。

文化を知りところを解するためには、書かれた文章を覚え、並べられた事物を知るだけでは充分ではありません。体験の記憶と自ら試みた実感をもって親しみひたるのでなければ、本当の文化を知ることにはならないのではないかと思います。

このような考え方から、私たちは日本の文化と歴史を体験し実感する旅筋、いわば「歴史を楽しむルート」としての「歴史街道」の開発整備を提唱するものです。

幸いにして日本では、主要な歴史の現場を、ほぼ歴史年代の順に訪ねる旅をすることができます。それは、さほど遠い距離でもなくあまり長い時間をかけることもない範囲にあります。つまり、「勤勉に楽しむ」日本人の性格にも、短い日数で日本を訪れる外国人にも、無理なく巡れるルートとなり得るのです。

この「歴史街道」構想は、日本人のところに伝えられてきた「生なり」の文化の源流というべき神話の地・伊勢からはじまり、古代から中世にかけての三つの都 - 飛鳥、奈良、京都 - とその近郊を巡り、秀吉以降の商人文化の中心地「大阪」、明治以降の国際交流を象徴する神戸を結ぶこととなります。

勿論、日本文化の最も古い歴史をもつこの地域には、多くの歴史文物があり、伝統的な行事や芸術技能が保たれております。また、隠された文物や知られざるところの跡も多いことでしょう。さらにこれから追加すべき「もてなし」のハードやソフトの開発も重要になるでしょう。新しい技術や思想を吸収し活用してきた日本の歴史そのままに、高度な技術や斬新な発想を導入しなければならないことも多いに違いありません。快適な移動方法や多彩な楽しみの導入も大切です。「歴史街道」は、常に開発され更新される知的な観光ルートでなければならないと思うからです。

文化は突如として興るものではありません。伝統を大切にしない文化が長く栄えたためではなく、新しい技術と発想の導入なしに長く保たれた伝統もまたありません。豊かな国になった日本は、その歴史とところに根づいた文化を、歴史の現場から世界に発信する必要があります。私たちは、この「歴史街道」を現代に生かすことが、二千年の日本の歴史に新しい楽しみを加えると共に、百年後、千年後に現代の英知と繁栄を伝える試みでもあることを願うものです。

今、日本では新しい街づくり、新しい国際交流の場の建設が進められていますが、同時に先人から受け継いだ歴史の現場を、新たな知的興奮の舞台にすることも大切ではないでしょうか。

1988年3月

世界を考える京都座会

松下幸之助

天谷直弘 飯田経夫

石井威望 牛尾治朗

加藤 寛 高坂正堯

堺屋太一 斎藤精一郎

広中平祐 山本七平

渡部昇一